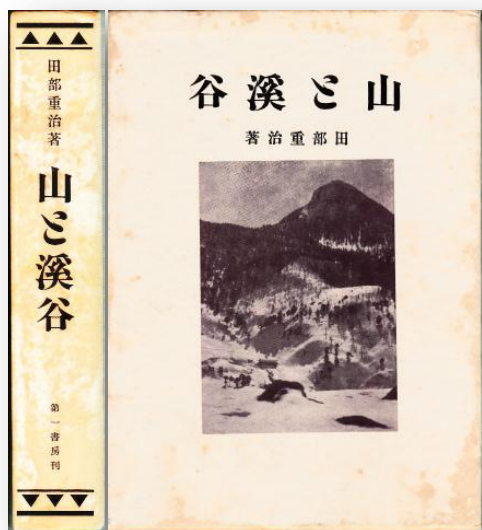


# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第13号

(2013年5月)



北光クラブ  
自然観察クラブ

田部重治著『山と溪谷』 第一書房発行

「山に入る心」より

山を歩く時、特に無人の境に漂泊する時、思いがけないほどの自然の美しい姿態が、世にならびない景色とたたえられ来たものよりも、遥かに美しい粧おいを以て、幽隱のつつましい溪谷から、或は幽林の奥ゆかしい彼方から、見る人の心の落着くいとまもあらせぬように、あらわれて来るのに接して、私は云いしらぬ喜びを感じると共に、顧みて、共に喜びを分けることの出来る友を毎もそう云う時に欲する。そして、そう云う友のないことを私は寧ろ一つの苦痛として感ずることが多い。18世紀末から19世紀の初めにかけての英国の批評家ウィリアム・ハツリットは、旅をする心を論じて旅は一人でやらなければならない、そうして初めて思う存分、気ままに瞑想をすることも、のびのびと歩くことも出来、又、面白くないことに共鳴を強いらるる必要もなく、他人に同情を求めて得られない不愉快さを感じずる必要もないと云っている。私はハツリットの抱いている心持の真なることを彼以上に感じている。しかし、私は特に無人の境に漂泊する時、そして此の無人の境から多少思いがけないものが期待されている時、又、此の期待されている物が、思いがけもせぬ方面から俄かに私の眼前に展開される時に、友なき苦痛はすべての楽しみをかきけすほどのものであることを痛切に感じている。

毎も私はかくの如き光景に接することの出来る旅を、初めから予定してかかるが故に、又、無人の境を漂泊することが、かかる光景に接せしめることが多い故に、私は初めから友を欲する。そして私は自然に対して憧憬の感情豊かな、感激性に乏しくない友を道連とする。ハツリットは友が喜ぶものに自分が喜びを感じることが出来ないが故に、又、自分が喜ぶものに、友がたのしみを感じてくれないが故に、一人旅を選ぶと云っているが、

(次ページへ続く)

私はかくの如き不都合を旅に於いて見出した事は余りない。其故は私は初めから自分の喜ぶものに楽しみを感じてくれるような友を道連としているからである。そしてよし凡ての点に於いて友の抱いている心持が、私と一致しないにしても、ただ一つの大きな喜びの一致が、他の小さな不一致の不満をかきけして、深い満足の感情をもたらしてくれることを感じている。(後略) (大正12年秋)



著者の山旅姿

田部重治著『山と溪谷』(昭和4年6月15日発行・第一書房)

※ 表記は読みやすさを考慮して適宜手を加えてあります。



目 次

表紙の本	田部重治『山と溪谷』より「山に入る心」・・・・・・・・・・	2
	人物紹介・田部重治・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
活動報告	春の自然観察会～田んぼの草花、里山の樹木、水生植物～・・・	6
次回案内	初夏の古峰ヶ原高原散策～関東ふれあいの道に沿って～・・・	10
読者からいただいたおたより	初めての高尾山ハイキングの感想・・・・・・・・・・	12
	山口さんの自然講座・花見とソメイヨシ・・・・・・・・	13
会長寄稿	山口龍治さんとの出会い・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14

## 人物紹介・田部重治（たなべ じゅうじ）

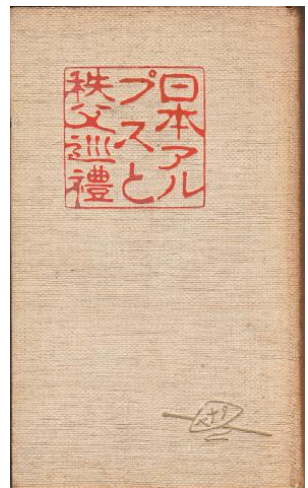
1884（明治17）年8月4日、富山県に農業を営む南日家の三男として生まれる。幼い頃から身体が弱く、郷里で朝夕立山連峰を眺め、中学生になると自然の美しさや文学に目覚めたが、山に登ることなど思いもよらず読書に熱中していた。1902（明治35）年に進んだ金沢の第四高等学校で、英文学の教授で旅行家かつ日本山岳会に所属する登山家であった林並木から山の話聞くのを楽しみとする。高校時代、母、母代りの叔母、若い許嫁（田部家の娘）、と相次いで失い、大きな心の痛手を負う（その後1910（明治43）年、26歳のときかつての許嫁の妹と結婚し、南日家から田部家へ養子となった）。

1905（明治38）年上京し、東京帝国大学英文学科に通い始め、偶然見つけた新潮社を訪ねたのがきっかけで、10歳以上も年上の木暮理太郎などと知りあい、やがて登山に関心を抱くようになる。1908（明治41）年大学を卒業し、8月の帰省途上、思い立って登った妙高山が最初の山となった。その秋から、明治大学の夜学で英語を教えながら、木暮と同じ下宿に住んで、小仏峠～高尾山を始まりとして木暮と日曜ごとに山に親しむようになった。

1909（明治42）年、日本山岳会に入会し、機関誌「山岳」に紀行その他を発表するようになる。同年5月甲武国境と雲取山、同年10月十文字峠より金峰山、翌1910（明治43）年夏薬師岳、奥大日岳より立山、針ノ木、大町、白馬岳、越中毛勝山、翌1911（明治44）年夏岩波茂雄、安部能成、市川三喜と烏帽子岳、東沢、立山温泉。翌1912（明治45）年梓山、八ヶ岳、御岳、上高地。

1913（大正2）年木暮理太郎と、テントをはじめ多く装備の軽量化を図り、当時の常識を破って山案内人なしで槍、双六、薬師、立山、剣という大縦走。1915（大正4）年7月は同じく木暮理太郎と毛勝山、剣岳、立山、赤牛岳、黒岳と黒部源流の山を縦走。1917（大正6）年夏小川谷から朝日岳、白馬岳、鹿島槍ヶ岳、針ノ木峠縦走など北アルプスを中心に活躍、当時としては記録的な業績を上げる。

しかし2人にとって本領はむしろ秩父にあり、縦横に歩き回って奥秩父の開拓につとめた。田部の秩父への傾倒ぶりは、ある極致を示している。「絶頂よりも溪谷、雪よりも深林という風



な変化が著しく私の山に対する嗜好の上に現われるようになってきた」最もよい登山は、峰から峰へ伝わるようなものではなく、「渓谷を深く深く登りつめ、深林にわけ入って、絶頂に攀ずること」さらに十全に山を享受するためには、「深林若しくは渓谷に一夜以上の野宿をするということを含んでいなければならない。即ち人跡を全く離れた物静かな処女林の中で、今湧き出したばかりの水のほとりに感慨深い一夜を過ごさなければならない」山に深く没入し、自然と同化しようとする田部の心の表白である。1912（大正元）年3月、中村清太郎と積雪を踏んで大菩薩嶺から柳沢峠を目指し、大黒茂谷で遭難し危うく助けられた。秩父の主な登山は、同年、雁坂峠、甲武信岳、1915（大正4）年、笛吹川東沢溯行、1917（大正6）年5月、笛吹川釜ノ沢溯行など。

1919（大正8）年6月慶応大学山岳部での講演「登山はいかに余に影響しつつあるか」でも述べられているように、日本の登山は、ただ山頂を目指すばかりでなく、峠、高原、山湖、渓谷、森林などを対象とする山岳地方の旅を含み、これらは山頂におとらず、それぞれの価値を持って登山者を引きつける魅力を持っているとし、その静観的な登山観は日本の登山界に大きな影響を与え、山旅という言葉を普及させた。

英文学者としては海軍経理学校から立正大、東洋大、法政大、日大などで教鞭をとり、ウォルター・ペーター、ウィリアム・ワーズワースなど19世紀英文学の研究・翻訳などに多大な実績を残した。法政大学では英文学科主任とともにスキー山岳部長も務める。

1950（昭和25）年4月日本山岳会名誉会員。1972（昭和47）年9月22日、88歳で没する。

登山に関する著書には『日本アルプスと秩父巡礼』『山と渓谷』『峠と高原』『山への思慕』『青葉の旅・落葉の旅』『ふるさとの山々』『わが山旅五十年』など多数ある。

雲取山にレリーフがある。

#### <参考文献>

- 山と渓谷社「世界山岳百科事典」（1971年7月1日発行）（山崎安治）
- 東京新聞出版局「岳人事典」（昭和58年7月27日発行）（山崎安治）
- 「山と渓谷」1976年1月号付録「登山者がぜひ読んでおきたい山の名著100」（日本山書の会編）
- 日本山岳会編『覆刻 日本の山岳名著 解題』（昭和50年10月14日・大修館書店発行）所収 横山厚夫「田部重治『日本アルプスと秩父巡礼』（大正8年6月・北星堂刊）」



（編集部）

## 春の自然観察会

～田んぼの草花、里山の樹木、水生植物～

4月16日（日） 天気・はれ

鹿沼学舎の皆さんとともに、見野から下遠部にかけての黒川沿いの自然を楽しみました。ハイキングに先がけて車に乗り合わせて喜久澤神社に参詣し、鹿沼学舎の福田純一氏より喜久澤神社の歴史、由緒についてお話をうかがいました。福田氏によると明治時代、神社は国社、県社、郷社の3階級に格付けされていましたが、鹿沼では3つの神社が県社に指定されました。喜久澤神社は今宮神社、加蘇山神社に先んじて県社に指定された、格式の高い神社であるとのことでした。（本誌〇ページに詳しく書いていただきましたのでご覧ください。）

見笹霊園の駐車場からハイキングに出発。田んぼはレンゲソウの赤、コオニタビラコの黄色、ナズナの白で彩られています。樹林帯に入るとエイザンスミレやニリンソウ、ウスバサイシンなど山地帯の草花が見られます。沢を遡って小さな滝を見学し、美しい溪流となっている黒川を見下ろし、最後は用水路で水の生き物を観察。広場で店開きもして、焼きソーセージや本格コーヒーをいただき、おやつのお裾分けにも与って、お腹いっぱいでお開きとなりました。

見るもの聞くもの盛りだくさん、内容の濃い催しとなりました。

（北光クラブニュース掲載）

### ※ 参加者

上原悠生・由美子、  
亀山義宗・千尋、佐々木伸二、  
鈴木若菜・康之、平井亜湖、  
山口龍治、石崎隆史・裕子、  
阿部良司（計12名）、  
ほかに鹿沼学舎から6名

鹿沼学舎の方たちと全員で記念撮影  
（見笹霊園にて）



※ 開花していた植物(草)

イヌナズナ、ウスバサイシン (右写真)、  
エイザンスミレ、オオイヌノフグリ、  
カラスノエンドウ、キクザキイチゲ、  
ミヤマキケマン、コオニタバコ、コハコベ、  
シロツメクサ、スイバ、スズメノテッポウ、  
セイヨウタンポポ、タチツボスミレ、  
タネツケバナ、ナズナ、ニリンソウ、ヒカゲスミレ、ヒメオドリコソウ、  
ヘビイチゴ、ホトケノザ、マルバスマレ、ムラサキケマン、ヤマネコノメソウ、  
レンゲソウ



※ 開花していた植物(樹木)

アオキ、イヌシデ、キブシ、ニシキギ、ニワトコ、  
モミジイチゴ、ヤマブキ、レンギョウ



※ 見られたキノコ

トガリアミガサタケ (右写真)

※ 見られた昆虫

モンシロチョウ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ミヤマセセリ

※ 出た鳥

ヤマガラ、ウグイス、ヒバリ、ハシブトガラス、メジロ

※ 参加者からいただいたおたより



ちいさいたきのところをかきました。ぼくは、はしをつくらうとしていました。それがぼくのしゅみです。だから、かわあそびがすきです。

(小 2・うえはらゆうき)

悠生の眼が輝いていたのがとても嬉しかったです。(中略)私も童心にかえり楽しかったです。

(保護者・上原由美子)

## 喜久澤神社について

喜久澤神社は、明治5年(1872)に設立された比較的新しい神社です。にもかかわらず、鹿沼市域では最も早い時期(明治7年)に、県社という高い社格を受けていました。それは、喜久澤神社が、万里小路藤房(までのこうじふじふさ)を祭っているためです。明治政府は、鎌倉幕府を倒し、建武の新政を行った後醍醐天皇を高く評価していたため、その側近である藤房ゆかりの神社として、喜久澤神社に高い位を授けたのでしょう。



「県社」の解説をする筆者

その由来は、明和4年(1767)に、隣接する長光寺の裏山から興国4年(1343)の銘を持つ鏡が出土したことにはじまります。銘文には「不二行者」という文字があり、藤房公ゆかりの品ではと言われました。鏡はその後、京都の妙心寺というお寺に納められ、現在も同寺で保存されています。

その後、天保15年(1844)に藤房の末裔である万里小路卿が日光例幣使として来た際、先祖の旧跡である長光寺を訪ねました。そして弘化4年(1874)、万里小路家から藤房の尊像が贈られ、それを祠をつくって祭ったのが、喜久澤神社の前身となりました。



「縣社喜久澤神社」とある

菊沢地区周辺には、このほかにも藤房にまつわる史跡や伝承が数多くあります。玉田町の「こうけ塚」(公家塚)、「トーカン森」(藤冠森)、千手町の「不二庵跡」(石碑があります)、見野の「笛吹河原」などが代表的なものです。

参考文献「鹿沼市史」「西見野村長光寺と古鏡について」 田野井武男(「鹿沼史林」25号)

(文責 福田純一)



※ 写真で振り返るあれこれ



←喜久澤神社の  
解説を聞く



タチツボスミレ

エイザンスミレ



←喜久澤神社  
本殿

下遠部の用水路  
での獲物で  
水槽の中は大混乱！→

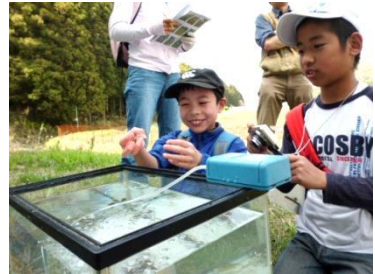


←名木百選の  
ツクバネガシ

おなかが赤い  
アカハライモリ→



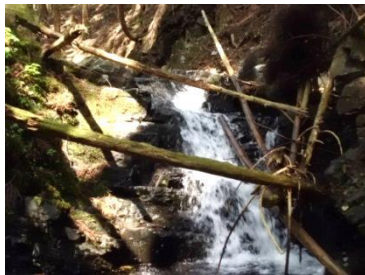
水の生き物  
大好き！→



ニリンソウ



キクザキイチゲ



下遠部にて→

←下遠部の  
小さな滝



初夏の古峰ヶ原高原散策  
～関東ふれあいの道に沿って～

…だが段々親しむにつれ、私を最も喜ばせたものは新緑の色だった。しかしそれを感じるに至ったのは、明治 41 年に学校生活を終え山に登り初めてからで、つまり新緑の美に目覚めるようにさせて呉れたのは、登山であったと言うことが出来る。(中略)明るくなって出て見ると立山、剣岳、毛勝山、大日岳、薬師岳一帯の山々が真白に残雪に蔽われ、平地に近いところまでも未だ白くなっているが、野辺は蓮華草や菜の花で美しく彩どられ、あちこちの農家を取り巻く新緑の若々しい色彩は、目も覚めるように鮮やかだった。その時から私は北国の田園の新緑も、武蔵野のそれに劣らずいいと思った。(後略)



田部重治著『青葉の旅・落葉の旅』(昭和 19 年 5 月 28 日、六合書院発行)

今月も鹿沼学舎の皆さんに合流し、鹿沼の素晴らしさを自然の中に見つけてみましょう。古峰ヶ原高原も新緑の季節、深山巴の宿から関東ふれあいの道に沿って散策すると、短い距離ではありますが、環境の異なるそれぞれの場所で、それぞれおもしろい発見があると思います。森林の中に巴の形に清流の流れる深山巴の宿、沢沿いの小湿地に立つヤチダモ、古峰ヶ原湿原の周辺にはズミやミヤマガマズミ、マユミの花、谷間に降りて行くとキハダやサンカクツルの古木、沢沿いにはウスバサイシンやエンレイソウの花、高原でさえするアオジやカッコウ、谷間でさえするコルリやミソサザイ…どんな発見があるか、お楽しみに。

日 時：5 月 26 日 (日) AM8：30 鹿沼市役所駐車場集合

行 程：鹿沼市役所——古峰神社大駐車場——関東ふれあいの道入口⑧——古峰ヶ原峠——深山巴の宿……小湿地……古峰ヶ原湿原(トイレ)……古峰ヶ原峠

(昼食) ……足尾沢……へつり地蔵……関東ふれあいの道入口⑩

——古峰神社大駐車場(トイレ)——鹿沼市役所

服装：防寒着、帽子、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、レジャーシート、雨具、弁当、おやつ、  
お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋

あると便利な物：双眼鏡、ルーペ、カメラ、図鑑、1/25,000 地形図は「古峰ヶ原」

会費：おとな 400 円、子ども 200 円、今年度初参加の方は保険料 800 円(年間)

申し込み・問合せ：5月24日(金)までに、

チャレンジスクール申込書で北光クラブ、または阿部、石崎まで。

問合せ：自然観察クラブ 阿部(電話 090-1884-3774)

石崎 電話 090-1464-6899

ちょっと先に  
(5月3日)  
行って  
見えました

### 春の古峰ヶ原の植物

古峰神社の鎮守の森である古峰ヶ原は、古い時代より森が守られてきた。鎮守とは、その土地に住む人々を災害から守る神がいる所であり、手つかずの自然が残っている。

沢沿いにはタチツボスミレ、フジスミレ、ウスバサイシン、ヒトツバテンナンショウ、ツルネコノメソウ、コチャルメルソウなどが見られ、古峰ヶ原湿原の日当たりのよい所ではフデリンドウやヒメイチゲの花も楽しめる。樹木ではヤマザクラが咲きほこり、オオカメノキの花も咲きはじめていた。葉が開き始めたウリハダカエデ、イタヤカエデ、ミツバウツギ、オヒョウ、カツラなどが見られ、所々に巨大なサンカクヅル(ギョウジャノミズ)があり、あたかも原始林を歩く感がある。

葉の形が三角形なのでサンカクヅルで、別名ギョウジャノミズ(行者の水)は、木を切ると水状の樹液がしたり落ちるこの水を飲んで、また行を続けることができたことから名付けられたブドウ科の蔓植物で、秋に実が熟し甘くて食べられる。



(山口龍治)

サンカクヅルの幹

### 初めての高尾山ハイキング(3月31日)の感想

北光自然観察クラブで初の県外活動、自分も東京都でのハイキングは初めてです。鉄道が大好きなので電車に乗ることが楽しみでしたが、高尾山からのながめも楽しみにしていました。

当日、鹿沼駅は晴れていました。小山で臨時「ホリデー快速河口湖3号」に乗りかえ。このころから少しくり空に。古河では満開のさくらを見ることができました。大宮で武蔵野線に入り、西国分寺付近で中央線へ。このあたりで天気があやしくなりました。時おりまどにあたる雨つぶ。となりの線路がぬれている。高尾駅ではホームがぬれていました。バスに乗って山のほうへ入ると雨がぱらつき始め、バスをおりるとかささすほどの雨でした。

上を見れば深いきり。心配したとおり上に行けば行くほどきりは深くなるばかり。最大で7m先までしか見えなくなり、そのまま城山へ。そこでお昼を食べました。が全くとお昼という感じはしない。まるでまだ朝早くのようでした。

城山から高尾山まではまず山を下ります。その道がとんでもなくどろどろ。わき道を下り最後は階段を上って高尾山へ。もちろんきりで何も見えませんでした。(後で見た、晴れた日の写真では関東平野がよく見えていました)

気を取り直して山を下り始めました。ケーブルカーに乗って下りたのですが、駅を発車するといきなりこう配が急に。「日本一の急こう配」というかんばんが見えたのはいっしょでした。

帰りの電車の中では「きりと雨さえなければ全部うまくいったのになあ」と考えていました。しかし上野駅ではぐうぜん寝台特急「北斗星」を見ることができ、少しは気を取り直すことができました。

鹿沼到着は9時過ぎでしたが、宇都宮まで乗った快速が1分でもおくれたら乗りおくれ、さらに1時間待たされていたと思います。

とにかくとても楽しい1日でした。



(5年・佐々木伸二)

## 山口さんの自然講座

### 花見とソメイヨシノ

春の自然観察ハイキングで一部の人に花見の話をしたが、改めてまとめてみた。

観賞する花の違いがあるものの、花見の文化は世界中にある。日本ではいつごろから行われていたかは定かではないが、奈良時代には花見の花といえば中国からもたらされた梅であった。

多くの人が桜を愛でるようになったのは平安時代の中頃からで、桜が咲くのは神様が下りてきたからだと考えられていた。このときだけは身分の差なく、共に神を崇めて宴を楽しんだ。これが今の花見の原点である。

外国では、場所を陣取って飲食することはない。日本独特の花見の文化と言える。

ソメイヨシノが咲く時期には毎年ズレがある。桜にかぎらず花が咲くのには温度が重要だが、温度だけでは咲かない。開花ホルモンのフロリーゲンと温度が結び合つてのこと。また、咲くはずのない秋に開花することもある。これは稀なことで、年内に開花ホルモンの整い、春先と同じ気候になったために狂い咲きしたのである。

ソメイヨシノの起源は、江戸時代の終わり頃、江戸染井村(巣鴨あたり)にあった吉野という植木屋が、オオシマザクラとエドヒガンを掛け合わせて作ったとか、見つけたものを接ぎ木で増やして普及させたなど諸説ある。後に、ソメイヨシノがこの2種類のF1(一代雑種)であることが実証された。

名にヨシノと付くが、奈良県吉野山は山桜であり、江戸の染井吉野とは関係ない。ソメイヨシノが普及するまでは、桜といえば、ヤマザクラであった。

(山口龍治)



←満開のヤマブキ



キブシ→



## 山口龍治さんとの出会い

山口龍治さんのことを思うと、僕はいつも本誌第9号で桜井節子氏が取り上げられた牧野富太郎の植物記の冒頭、「萬葉歌のツチハリ」の中に出てくる永沼小一郎のことが脳裏に浮かぶ。「氏は實に世にも得難き碩学の士で博く百科の學に精通し、其れが亦通り一遍の知識でなく悉く皆深邃の域に達してみられた。」というものだ。

山口さんは奈良県葛城市の出身。子供の頃からチョウとガが好きで、興味は食草にまで及んだ。郷里で近鉄が主催する自然観察会等に参加され、奈良女子大学名誉教授で植物解剖学の小清水卓二先生、城南女子短期大学教授でカミキリムシが専門の林匡夫先生、滋賀大学名誉教授で菌類が専門の本郷次雄先生等と交流を持って勉強された。

僕が山口さんにお会いしたのは実に偶然である。一昨年(2019年)の10月、僕は自然観察クラブの例会として「茂呂山自然植物園の試み」を計画した。資料を作るために1週間前の日曜日、茂呂山に出掛けた。写真を撮りつつ、あっちの道を歩いたり、こっちの藪に入ったりしながら頂上に着いた。すると1人の男性が椅子に腰掛けている。僕は山で人に出会っても、たいてい「こんにちは」と声を掛けるだけである。もちろん茂呂山でも普通はそれで終わる。しかし、そのときはそれでは終わらなかった。なぜなら彼が捕虫網を持っていたからだ。最近(2018年)はツマグロヒョウモンの出現で、野原では秋でもチョウがよく見られるようになったが、茂呂山に、しかも何もいそもない秋に捕虫網を持って来るのはよほどの専門家だろうと思って、「何か虫がいるんですか」とつい訊いてしまった。「ええ、秋でも時々蝶や蛾が飛ぶことがあるんです。」と教えてくれた。「僕は樹を見に来たんです。」と言って二人で話しながら山を下りて行った。すると彼はこんなことを語り始めた。「以前キハダの大木があったんで

(次ページへ続く)

すけど、いつの間にか切られてしまいました。頭にきましたよ。」茂呂山にキハダがあったらどうか、それも大木が？ 山腹を走る林道を歩きながら、「そういえばこのあたりに名前のわからない樹があったな、確か羽状複葉だった」と考えながら道端の樹木をひとつひとつ確かめて歩いていくと、それがあった。「ああ、これキハダか？」と僕が声を上げると、山口さんも「ああここにもキハダがあったんですね。」と答えた。その日は山口氏からウラジロノキの在り処も教わった。そして帰り際、「来週、ここで自然観察会をやるので、ぜひ来て下さい」と伝えて別れた。

山口さんは平成10年に仕事の関係で鹿沼に来られた。主なフィールドは茂呂山。それは車を持たない彼の住まいが栄町であるからだ。山口さんは植物や菌類、昆虫から地質学にも精通しておられる。

創刊1周年を迎えた本誌が少なくとも1年間、充実した内容を保つことができたもの、ひとえに山口さんのおかげです。山口さんは今年定年を迎えられ、秋までには郷里に戻られる予定です。

(阿部良司)



田部重治と木暮理太郎（茨木猪之吉・画）

## 会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。  
また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭に置いてあります。(無料)  
確実な入手をご希望の方は、年会費(1,200円)をお納めいただければ、  
ご自宅まで郵送いたします。



### 鹿沼の自然・栃木の旅 月報第13号

2013年5月1日発行  
北光・自然観察クラブ  
鹿沼市戸張町1818  
(クリーニングハウスあべ内)  
発行人 阿部 良司  
年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ



検索